特集③

農音流・移住促進&地域活性

NPO法人 農音 代表理事 田中 佑樹（松山市）

日本一のみかん島『中島』60歳が若手と呼ばれる超高齢社会

松山市沖に点在する忽那諸島。その中心に位置する中島は、全国の離島のなかでもみかんの生産額が日本一の島だ。

かつて柑橘産業で栄華を誇った中島だが、消費・価格の低迷により後継者不足を余儀なくされてしまい、柑橘産業は衰退の一途を辿っている。現在は高齢化率が60％にもなり、生産量のみならず高品質を保ち続けてきた生産スキルの維持さえも危ぶまれている。

また、管理されてきた園地も人の手が入らなくなれば、わずか数年で自然に還る。そして野生鳥獣のかっこうの住み処となる。高齢者の離農に比例してイノシシの食害が拡大し、現役生産者の営農を圧迫する形で悪循環が生まれている。

こういった悪循環の影響は農業だけに留まらない。2800人の人口は年に100人のペースを保って減り続け、この数年で閉店した飲食店や商業施設も少なくない。コミュニティそのもののダウンサイジングが現実に起こっており、島民はおろか行政の誰しもが半ば諦めた状態のまま、延命措置と言わざるを得ないような対策しか打てないでいる。

移住者には園地の斡旋も行う。農業経験ゼロからだと園地の選び方も分からないので、借りる際は相談が必要。

都市部から田舎への移住促進 離島と都市部を繋ぐNPO『農音』

そんななか昨年、首都圏に暮らす若者の40％近くが田舎暮らしに憧れているというデータが発表され、国が掲げる地方創生の鍵を握るであろう若者の動向に注目が集まっている。

昨年7月に法人化を果たしたNPO『農音』は、愛媛県内ではその代表的な事例といえよう。農音とは、首都圏でフリーター生活を送っていたバンドマンたちが「集団で田舎へ移住しよう！」と一念発起して発足した団体。〝農業と音楽で地域を結ぶ〟をキャッチコピーに掲げ、農業で生活費を確保しながら自由気ままな田舎暮らしを楽しもうという趣旨で活動を開始した。

当初の活動内容は至ってシンプル。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）で楽しい島暮らしを発信しながら、一貫して気軽な移住を呼び掛ける。そして移住の問い合わせがあれば、まず島まで遊びに来てもらい、友達のノリで島を案内したのち、酒を飲みながら人生哲学を語らう。これを「酒飲みシステム（＝SNS）」と名付けたラッパーの移住者がいる。冗談のようなネーミングだが、実際に移住促進活動を行うなかで、民間ならではのこのノリが非常に重要だと痛感している。

その後、移住の意志が固まれば、その「友達」の家探しや畑探し、場合によっては仕事探しを手伝う。これにより、一人目の移住から3年間で移住者数は30人に上り、現在も移住予定者を増やし続けている。

移住希望者には空き家や、すでに移住している人の生活を紹介するなどしてイメージを持ちやすいよう努める。

移住者と島民が混在するバンドを編成して地域のイベントに出場。歌詞に移住者の想いを込めて島の人に伝える。

若者特有の〝適当なスタンス〟が目を引いたのか、今年1月には共同通信社と全国の地方新聞社が合同で開催する地域再生大賞の第5回記念賞を受賞し、農音の活動は全国的にも高く評価して頂いているようである。

活動の拡大とともに問題も表面化

移住者の獲得に関してはとりあえず成功しつつあるが、中島の島内では必ずしも順風満帆というわけではない。

移住者、とくにもともとフリーター生活を楽しんでいたような若者は、そもそも勤勉の美学というものを持ち合わせてはいない。必要最低限の生活費が確保できるだけ働けば、あとはゆったり過ごせる生活を求めた結果、支出の少ない田舎暮らしに答えを見出したという人もいる。つまり農業ではなく、本質的に悠々自適な農的生活を求めているのだ。

一方、地元の農家さんの多くは、日本を貧困時代から支えてきた世代。汗水を流して働くことが素晴らしいことと考えており、中島で言えば、人を計る基準は〝良いみかんをどれだけ多く作れるか〟が主軸となる。

どちらもそれぞれが育った時代背景を鑑みれば至極まっとうな主張である。しかし、この意識のギャップはややもすれば対立構造にも発展しかねない。さらに、このような価値観の違いは、地区生活の様々な場面で些細な問題となって事ある毎に噴出する。

地域の活性化を標榜するNPOとしては両者の見解を擦り合わせて落としどころを見付けていくのが妥当と思われるが、個人的には、実はそれらを地区スケールでの親子ゲンカ程度に捉えて楽観している。例えば、父子であっても歩んできた道が違えば、ときにはケンカ腰でものを言い合うくらいのほうが健全だ。実際に、地区意識の高い田舎は、いわば大きな家族。同じ島に住む者同士、家族のように時間をかけてコミュニケーションを取り、それぞれのスタンスを知っていけば、次第に互いを認め合っていくだろう。

難しい問題だからこそ緩やかなスタンスで臨む

発足から数えると農音の活動はもう4年目。当初は、都会から来た若者を遠目に見ながらいぶかしがるだけだった方々からも応援の声を頂くようになり、団体として目指すところも少しずつ認知されてきたと実感している。移住者が島民と結婚したり、島に新しい子供が生まれたりすることで、ヨソ者から島民へと意識が変わっていく様も見て取れる。

こういった一つ一つの変化こそが、過疎高齢化のスパイラルを改善していくための答えだと感じている。

取り組むべき課題はまだまだ山積しているが、こと人間関係の構築や農業技術の習得など時間を掛けねば解決できない問題も多いので焦っても仕方ない。それこそ誰も手がつけられないでいた難題に取り組んでいるのだから、自分たちなりのやり方でやるしかないのだ。そして、せっかくなのだから楽しみながらやらないと損だ。

NPOとして移住者に奨励している数少ないルールの1つがまさにそれ。「なるべく楽しく暮らしましょうね」だ。

ベテラン生産者さんに昔ながらの農業を教わりながら親交を深める。まず先人の知恵を学ぶことで話題が広がる。